

目指す学校像（ミッション）		深い理解を伴う知識学習を基本とした、心豊かな創造力・発信力をもった国際社会に貢献できるリーダーの育成						
本年度の重点目標		1. 高いレベルの知識学習を基盤とした探究的な学びを深め、多様性や関係性を重視する協働的な学びを目指す 2. 各学年の成長に合わせた学年集団の主体的な取り組みと学びの質の向上 3. 一人一人の問いをより深く展開できるテーマや題材を設定し異学年活動の質を高める 4. 教育活動を充実させるための教育環境整備を行うとともに、保護者の求める情報を迅速にわかりやすく発信し信頼と期待に応える学校づくり						
学 校 自 己 評 価								学校関係者評価(令和4年4月) (保護者代表4名・学校代表3名)
評価項目	年 度 当 初		中間評価（10月）	最 終 評 価（3月）			意見・要望・評価等	
	現状と課題	具体的な方策	経過・進捗状況	経過・達成状況等	達成度	次年度の課題		
1 よりよい授業を目指す授業開発の取り組み 授業改善	【P】 探究型の学びを深めるための徹底した知識・技能の習得が課題。 【S】 知識・技能の獲得学習に時間を割き、対話的・協働的で深い学びにまで至らない授業も多い。	【P】 基礎・基本的な知識・技能を反復練習しながら確実に定着させる。授業力向上を目指して互いに授業を見合い研鑽する。 【S】 家庭学習を有効に活用し、基礎・基本的な知識・技能の定着を図る。問いを工夫して主体的な学びを促し、学び合いを通して深い学びを獲得させる。	【P】 小テストや家庭学習等を通して基礎基本の定着を図っている。研究会を活用して、お互いの授業見学をしたり録画し振り返ったりすることで実践力向上を図っている。 【S】 事前に学習できることは家庭学習とし、それを踏まえて授業を進めるスタイルが確立しつつある。しかし、発展的な学び合いに向かうのが難しく、協働で解決していくように心がけている。	【P】 基礎的な力を身につけるには課題が残った。計画的な授業研修や研究会の実践により探究型の学びを意識して行うことができた。 【S】 協働的な学びは制約を受けたが、主体的・対話的な学びの時間は増えてきている。未だ深い学びの獲得には至らない授業も多い。学力の底上げの方策は成果を上げられていない。	【P】 B 【S】 B	【P】 基礎的・基本的内容の定着度には、教科によってすでに大きな個人差が見られる。授業で学んだ内容の習熟・深化を、個に応じた家庭学習で補完していくことが必要である。 【S】 知識・技能の獲得が主眼となつてしまい、児童・生徒の学習意欲や学び合いなど、主体的な学びにつながらないことが見受けられる。	・先生方の研修や研究会の実践、また自己研鑽が、児童生徒自身の努力と合わさり、今後の深い学びに生かされていることを期待したい。 ・各教科の課題が多く、がんばっているようである。より高い成果を得るためには、教師、生徒双方の努力が欠かせない。 ・学びに関しては個々の学習能力もあるが、家庭での学習も大切だと思う。	
2 学年を軸に児童・生徒が主体的に活動する学校生活・学校行事の実現 主体的な活動	【P】 児童会活動・フィールドワーク・行事等が更に主体的な活動になるための探究テーマ設定と具体的な指導計画の明確化が課題。 【S】 プロジェクト型テーマ学習は、対象学年の学習者は毎年異なるが前年踏襲型となりつつある。コロナ禍での実施に工夫が課題。	【P】 発達段階に合わせた探究テーマを明確に設定し仲間と協働して計画・実行・検証を繰り返し経験させる。 【S】 学年フィールドワークでの探究活動では、学習者の個々の疑問（課題の発見）を深く追求させることで、主体的な取り組みを促す。	【P】 探究ノート、ICT 機器を活用して児童の疑問や気づきを軸とした主体性を大切にしながら体験～探究までの学びのプロセスを設計することに努めている。 【S】 探究活動は意欲的に取り組んでいるが、主体的に取り組むための、事前に知識を付けたり、課題に対して予測したりする活動がまだ足りない。	【P】 学年の探究テーマから児童の探究心を引き出し年間通して主体的に探究活動を行うことができた。 【S】 テーマ学習とフィールドワークはコロナ禍で発展的な取り組みは少なかった。探究はまだ調べ学習で完結する問いが見られる。	【P】 B 【S】 B	【P】 本来のFW が実現できなかったが、探究テーマが自分ごとになるよう協働的な学びの中で、実現できている。 【S】 プロジェクト型テーマ学習においても、基礎的・基本的な内容理解が基盤となる。そのあたりのバランスを考えた取り組みを工夫したい。	探究は毎年テーマが変わることにより、発表のための形づくりが優先になっているように思われる。1年で完結させず、長期の調査や実験など行いながら進められると良いと感じた。学校生活・行事は、生徒の「やりたい。」に限界まで向き合ってください、「何としてもやる。やりきる。」力をつけていただけた。達成感が自己肯定につながっている。	
3 異学年齢のよさを活かしたTeamの運営 Teamの充実	【P】 異学年活動では学び合う楽しさの中で探究心を持ち取り組むことができている。一方で Team テーマ探究は体験活動中心になりがちである。 【S】 学齢に応じた Team 内での役割を自覚するとともに、個性を伸ばせる環境の中で Team を1つにまとめていくことが課題。	【P】 一人一人の問いをより深く展開できるテーマや題材を Team 探究テーマとして設定する。 【S】 Team での取り組みに対し発達段階や個性に応じた役割を討議し、実行していく過程を通して Team をまとめていく力を獲得させる。	【P】 児童それぞれの経験をもとに異学年で学び合い様々な角度から捉え、疑問解決へとチャレンジすることはできているが、一人一人の問いを立て児童自ら探究を深めるには低学年には難しい。 【S】 Team の組織づくり、一人一役を決め、実践し振り返りの機会を作るようにしたが、全員が役割を十分に果たしているとは言えない。	【P】 長引く制約で表現や Team 探究が予定通り行えなかった。問いを立て疑問解決する学びは協働学習を重ねながら実践できた。 【S】 上級生が行事を通してリーダーシップを発揮する場面も多く、行事を経るごとに Team に一体感が増し、「表現」では完成度の高い発表ができた。	【P】 A 【S】 A	【P】 生活を共にする集団としての個性があまり表出してこなかったが、協働的な学びの場としてよい体験をしている。 【S】 Team の成員としての自覚と主体性に課題が見える児童生徒が目立つ傾向にある。そのあたりの温度差をどのように埋めるかが課題である。	コロナ禍においてかなりの制約がある中でも生徒たちで最後までやり切れた事は評価していいと思う。制約の中できかに Team をまとめ問題の解決に自己犠牲もしながらも努力してきた上級生を育ててきたのも異学年齢の良さだと思う。	
4 教育環境の充実と保護者や入学希望者への情報の充実 教育活動の充実	【PS】 あらゆる教科、場面でICTを活用した教育活動の充実を図る。保護者との連携・連絡ツールとしての Google classroom 情報発信の改善。	【PS】 全学年でICTを活用した授業・教育活動を積極的に展開していく。情報発信ツールを整備・改善し保護者との連携を強化する。ホームページを核に動画コンテンツなどオンラインでの広報活動を充実する。	【PS】 Google classroom を活用し、手紙だけでなく課題の配信もできている。児童・生徒の活用場面もさらに増やし、よりよい学びができるよう実績を増やす必要がある。	【PS】 ICT 環境はある程度整備されてきている。教科教育でのデジタル教材の活用を研究すると共に、保護者との双方向での情報共有については利用方法の簡便化に更なる整備が求められる。HPによる情報発信は充実してきている。	【PS】 B	【PS】 ICT の活用場面を開発すると同時に、活用の効果検証を並行して行っていくことが必要である。とりわけ、次年度は、低学年にも一人一台の端末が整備される。リテラシーとともに、授業での活用についてより一層の工夫が必要である。	・ICT、Google classroom とともに、日々検証され整備されていると感じるが、更なる整備も期待したい。 ・HP は、コロナ禍の中で来校できない保護者や、入学希望者にも多くの写真と細やかな説明で情報発信され充実している。	

◆ 達成度 A：ほぼ達成（8割以上） B：概ね達成（6割以上） C：変化の兆し（4割以上） D：不十分（4割未満）

◆ 【P】とは：プライマリー課程（小学校1年生～4年生） 【S】とは：セカンダリー課程（小学校5年生～中学校2年生）